

秋の一泊旅行

秋は因幡の古跡に雁渡し吹く

—鳥取市周辺の史蹟をめぐる—



因幡の国中 国府平野

主催 備陽史探訪の会 企画 旅行委員会

平成14年(2002)10月19日・20日(土・日)

備陽史探訪の会2002年秋の一泊旅行

秋澄む因幡の古跡に雁渡し吹く

—鳥取市周辺の史蹟をめぐる—

《 旅行委員 》

CONFIDENTIAL

備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

《 参加者名簿 》

CONFIDENTIAL

備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

秋澄む因幡の古跡に雁渡し吹く —「鳥取市周辺の史跡を訪ねる」行程表—

【初日＝10月19日[土] 晴れ・曇り・雨】

*福山駅北口集合	7:20	
*福山駅北口発	7:30	
*福山東IC着	7:45	
*真庭SA着	8:50	(トイレ休憩)
*真庭SA発	9:05	
*津山IC着	9:25	
*流しびなの館着	10:25	(トイレあり)
流しびなの館発	11:05	
*因幡国府跡着	11:35	
因幡国府跡発	11:55	
*万葉の館着	12:00	(昼食・トイレあり)
万葉の館発	12:40	
*因幡万葉歴史館着	12:45	(トイレあり)
因幡万葉歴史館発	13:25	
*梶山古墳着	13:40	
梶山古墳発	14:00	(徒歩で移動)
*岡益の石塔・岡益廃寺跡着	14:10	(トイレあり)
岡益の石塔・岡益廃寺跡発	14:30	
*宇倍神社着	14:45	(トイレあり)
宇倍神社発	15:10	
*鳥取藩池田家墓所着	15:20	(トイレあり)
鳥取藩池田家墓所発	15:50	
*樽谿(おうだに)神社着	16:10	(トイレあり。省略する場合も)
樽谿神社発	16:40	(省略する場合も)
*岩井廃寺跡・御湯神社着	17:10	
岩井廃寺跡・御湯神社発	17:30	
*かんぼの宿「鳥取岩井」着	17:40	
休息・入浴等	17:50	
宴会(夕食)開始	19:00	
宴会(夕食)終了	20:45	(希望者はカラオケ・2次会へ)
消灯	22:30	(荷物整理を済ませること)

《かんぼの宿「鳥取岩井」部屋割》

【2階】

- *《209》10畳(5名)
- ◎《213》15畳(7名)
(本部室)
- *《215》15畳(6名)

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

【3階】

- *《306》6畳(3名)
- *《307》8畳(4名)
- *《308》10畳(6名)
- *《309》10畳(6名)
- *《301》洋室(1名)

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

【2日目 = 10月20日 [日] 晴れ・曇り】

*起床	6:45	
*洗面・土産物購入	7:25	までに
*朝食	7:30	
*かんぼの宿「鳥取岩井」発	8:15	
*摩尼寺下着	8:40	
*摩尼寺境内着	8:55	
*摩尼寺下発	9:30	
*玄忠寺(荒木又右衛門墓)着	9:50	(トイレあり)
*玄忠寺(荒木又右衛門墓)発	10:35	(徒歩で移動)
*景福寺(後藤又兵衛墓)着	10:40	
*景福寺(後藤又兵衛墓)発	11:00	
*鳥取県立博物館着	11:20	(トイレあり / *歴史考古展示を中心に見学)
*鳥取県立博物館発	11:55	
*鳥取城二の丸跡着	12:00	(昼食休憩)
*鳥取城二の丸跡発	12:40	
*仁風閣着	12:45	(トイレあり)
*仁風閣発	13:25	(*しばらくトイレがないので必ずトイレに行くこと)
*布施古墳着	14:00	
*布施古墳発	14:25	
*布施天神山城着	14:35	
*布施天神山城発	15:00	
*青谷上寺地遺跡展示館着	15:40	(トイレあり)
*青谷上寺地遺跡展示館発	16:00	
*道の駅「犬挟」着	17:10	
*道の駅「犬挟」発	17:25	
*湯原IC着	17:55	
*高梁PA着	18:20	(トイレ休憩)
*高梁PA着	18:35	
*福山東IC着	19:30	
*福山駅北口着	19:45	

【2日目 = 10月20日 [日] 雨】

*起床	6:45	
*洗面・土産物購入	7:25	までに
*朝食	7:30	
*かんぼの宿「鳥取岩井」発	8:15	
*玄忠寺(荒木又右衛門墓)着	8:50	(トイレあり)
*玄忠寺(荒木又右衛門墓)発	9:35	(徒歩で移動)
*景福寺(後藤又兵衛墓)着	9:40	
*景福寺(後藤又兵衛墓)発	10:00	
*鳥取県立博物館着	10:15	(トイレあり / *歴史考古展示を中心に見学)
*鳥取県立博物館発	10:55	
*鳥取城二の丸跡着	11:00	
*鳥取城二の丸跡発	11:15	
*仁風閣着	11:20	(トイレあり)
*仁風閣発	12:00	
*観音院着	12:20	(昼食、*必ずトイレに行くこと)
*観音院発	13:20	
*布施古墳着	14:00	(*雨がもの凄く激しければ省略)
*布施古墳発	14:25	
*布施天神山城着	14:35	(*雨がもの凄く激しければ省略)
*布施天神山城発	15:00	
*青谷上寺地遺跡展示館着	15:40	(トイレあり)
*青谷上寺地遺跡展示館発	16:00	
*道の駅「犬挟」着	17:10	
*道の駅「犬挟」発	17:25	
*湯原IC着	17:55	
*高梁PA着	18:20	(トイレ休憩)
*高梁PA着	18:35	
*福山東IC着	19:30	
*福山駅北口着	19:45	

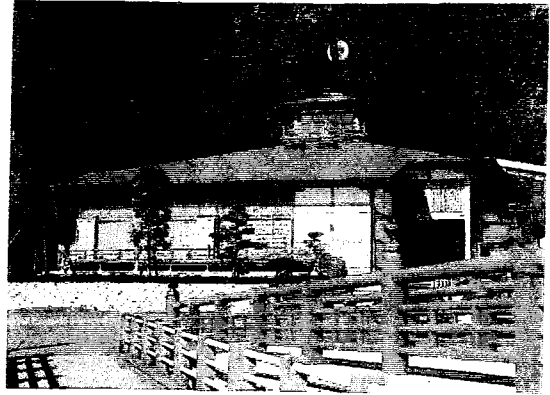
★流しびなの館 (ながしびなのやかた)

鳥取県八頭郡用瀬町大字別府に所在する雑(ひぢ)人形専門の資料館。

中国山脈に源を発した智頭(5頭)川と佐治(さじ)川が合流して千代(せんたい)川となると、昔から宿場町として栄えたのが用瀬の集落である。ここでは古くから「流しびな」の伝統が伝わっている。そもそも流しびなの起源は奈良時代といわれ、最初は草人形を作り、それで自らの体を撫でて汚れを移して川や海に流し、それからの1年を健康に暮らせるよう祈った民俗信仰から生まれたものである。旧暦の3月3日に流す用瀬の流しびなは、いまや全国的に名が知れわたり、昭和60年(1985)、鳥取県の無形民俗文化財に指定された。

流しびなの館は、昭和63年(1988)3月に室町時代の京都金閣寺をモチーフにして、地元の材木を使って造られた一部3階建ての大型木造建築である。なかには江戸時代から現代まで、各時代ごとの内裏雑から土雑まで約600点が展示してある。

たまたま鳥取県では「第17回国民文化祭・とっとり2002」が開催中であり、10月19日は流しびなの館で「ふるさとなんでも夢まつり・流しびなの祭典」が開催されているはずである。



《金閣寺をイメージした「流しびなの館」》



《用瀬の流し雑》

★因幡国府・国庁跡 (いなばこくふ・こくちようあと)

岩美郡国府町中郷地区に所在。旧因幡国のほぼ中心を、因幡の母なる川といわれる千代川(せんたいがわ)が中国山地から日本海に向けて流れている。その源流は、かつては鉄穴(かねあな)流しの砂鉄の原産地であった。そして下流には、鳥取砂丘に代表される砂丘地帯や平野が形成された。

鳥取の市街地の南側で合流される支流の袋川をさかのぼって行くと、豊かな水田地帯が広がり、やがて西に面影山(おもかげやま)、東に甌山(にしきやま)、南に今木山(いまきやま)が見えてくる。大和三山の耳成山・畝傍山・天香具山になぞらえて因幡の人たちはこれを「因幡三山」と呼んでいる。この三角地点のほぼ中心に古代の因幡国



《因幡国庁跡の復元された柱》

府がおかれた。645年の大化の改新以来、律令国家体制が整えられたころ、全国に68の国府が置かれた。ただし、ここでいう全国とは、蝦夷(ヌ)族の東北地方、および隼人族が支配する南九州一帯は除かれる。

この国府町中郷地区、当時の『因幡国風土記』の地名でいえば、「法美郡(ほうみのり)宇倍山の麓」が当時の政治・経済・文化の中心地となり、ここに政務を司る官人の館、軍団の兵舎や武器庫、駅家(うまり)、各種の工房などが置かれたのである。

一般的にいえば、国府は「方八丁(一辺が約880m)」の広さがあり、その中心部に国庁がある。その国庁は全国でほぼ統一された画一的な構成で、溝、柵、築地などで囲まれた一区画の中に、正殿と前殿および後殿、それを挟んで左右に脇殿があり、その周囲に官人の住む館があったとされる。

因幡国府および国庁跡が確認されたのは昭和54年(1979)である。国府町で團場(だま)整備事業が計画されたので、鳥取県教育委員会が昭和47年(1972)から同54年にかけて因幡国庁と国分寺及び尼寺跡の調査を実施した。

その結果、東西150m、南北213mにわたって東・西・南の三方を溝や石壁で囲まれた一区画が発見され、そこに東西16m、南北15mの正殿、その北側に後殿と思われる東西15.3m、南北9.5m、さらにその東西に連なる一对の掘立柱の建物跡がおのおのあった。

また、正殿の南約80mのところには東西23m、南北12mの建物跡があり、これは国庁の南門と考えられている。よってそれらが南面する国庁跡と推定され、「因幡国府跡」として約32000㎡(うち現在は約7000㎡が公園となっている)が国の史跡に指定されている。



因幡国庁跡周辺の史跡

公園となっている)が国の史跡に指定されている。これは近江・出雲・周防国府跡に次ぐ全国4番目の史跡指定である。

確認された国府跡の建物群は5期に分けられ、第1期は平安時代初期、第5期は鎌倉時代初期とみられるが、主要な建物群の遺構として確認されたのは、第4期の平安時代末期の施設とされている。また南門はそれより一時期新しい鎌倉時代のものである。

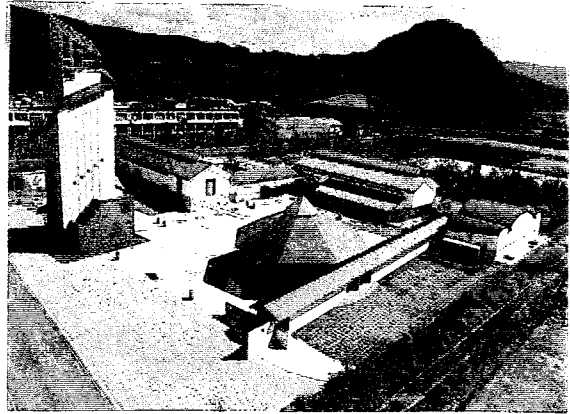
最初に因幡国守として名前が出てくるのは、船素勝(ふねのすかつ、従五位下、文武4年[700])である。それ以後、名前のおとっている人では大伴家持(従五位上、天平宝字2年[758])がいる。また、和氣清麻呂(従五位下、神護景雲3年[769])は、有名な宇佐八幡神託事件で因幡へ左遷されたが、『続日本記』には、「いまだ任所(因幡)へ行かざるに、詔あり、除名して大隅に配す」とでてくる。さらに平家滅亡の前年、寿永3年(1184)には、源頼朝が公卿たちに働きかけて大江広元を因幡国守として送りこんでいる。

一般的に各地の国府跡は、8世紀の末になるとだんだんと廃絶して、その遺構が不明になるのに対して、因幡では奈良時代の遺構は検出されなかったものの、平安時代末期から鎌倉初期にかけての遺構が確認されること、また同時に、その期間の国守の名前も比較的によく残っているなど、全国的にきわめて珍しく、貴重な遺跡である。

★因幡万葉歴史館(いなばまんようれきしかん)

国府町大字町屋に所在。因幡万葉歴史館は、因幡国庁域の一郭、ほぼその中央域と認められる大字町屋に開館した。ニューメディアを導入した新しいタイプの資料館であり、同時に、天平のロマン漂う万葉・王朝時代に華ひらいた、華麗な因幡古代文化の粋を集めた資料館でもある。

歴史本館の大伴家持ホールでは、『万葉集』を編纂し、そしてその中に479首の歌を残すなど万葉歌人として活躍し、一時期に因幡国司をするなど、大伴氏の族長として政治の世界を生きぬいた大伴家持に焦点をあてて紹介している。



《因幡万葉歴史館全景》

また、伊福吉部徳足比売(いふきべとことりひ)

め)ホールでは、国府町岩常山中の徳足比売の墓(国史跡指定)から発見された同女の骨蔵器が必見ものである。この骨蔵器は銅製で、蓋に埋葬の由来を記した墓誌16行108字が刻まれている。それによると同女は、文武天皇に妾女(うぬめ)として仕え、慶雲4年(707)、従七位下を贈られ、翌和銅元年(708)、大和で死亡。2年半の殯(もがり)ののち、和銅3年(710)に火葬にされて、骨灰は故郷に送られて埋葬されたというものである。近畿以外の地で骨蔵器が発見されたのは2例しかない。これともう一つは、吉備國小田川近くの山裾から出土した、吉備真備の祖母の骨蔵器である。ともに非常に貴重な逸品である。

そのほか、因幡地方とその近辺でしか見ることのできない民俗行事を楽しめる「民俗館」、因幡の民俗芸能を紹介するハイビジョンセンター「映像館」、多目的スペース「伝承館」そして因幡三山をはじめ、万葉の里を一望できる「時の塔」などもある。

☆大伴家持(おおとものやがもち)

大伴氏は天押日命(あめのおしひのみこと)を祖神(おやがみ)、道臣命(みちのおみのみこと)を遠祖(おんそ)とする古代の最有力豪族である。天皇の側近として、物部氏や蘇我氏が政権の中核を握っていた時代には、大伴一族もやや低迷していたが、物部氏は蘇我氏によって滅ぼされ、その蘇我氏も大化

の改新のクーデターで滅亡すると、大伴一族は再び大和政権で重きをなすに至った。家持の祖父安麻呂は、壬申の乱では大海人皇子（後の天武天皇）に従い、以後順調な官途をたどって和銅7年（714）、従二位大納言兼大將軍で亡くなった。

父旅人（たび）は養老2年（718）、中納言で46歳のとき、妾腹ではあったが、ようやく念願の男児を得ている。それが大伴家持である。旅人の正室の大伴郎女（いらつめ）には子供がなかったために、家持は大伴氏を継ぐ嫡男として大事に育てられた。

祖父安麻呂や父旅人は元々律令官人としての教養も積み、また万葉歌人としても数多くの歌を残している。また旅人の正室の大伴郎女もなかなか情感豊かで文才があり、立派な万葉歌を多数詠んでいる。ちなみに郎女の異母兄の大伴宿奈麻呂（すくなまろ）は養老3年（719、この年に備後の茨城・常城が停止）、正五位下で備後国の国司を任命、あわせて安芸・周防2国の国司を檢察すべき按察使（あせし）にも命じられている。

家持は天平8年（736）、18歳で天皇に近侍する内舍人（うちねり）として出仕した。歌を叔母の坂上郎女から学んだが、なんといっても名門貴族出身でハンサムな若きエリートはさまざまな女性から大いにもてたようである。多くの残されている恋歌から察すると20人以上の恋愛遍歴があったようである。

天平18年（746）、従五位下で宮内少輔に任じられたあと、その3ヶ月後には29歳の若さで越中の国司に任命された。その在任中に彼は

「海行かば 水漬（みづ）く屍（かばね） 山行かば 草生（くさ）す屍」
の歌を残している。

そして4年後の天平勝宝3年（751）には少納言に昇進して都に帰っている。その後も天平勝宝6年（754）、山陰道巡察使、天平勝宝9年（757）、兵部大輔、翌天平勝宝10年（758）、41歳で因幡国の国司に任命された。彼はその翌年の正月元旦の郡司などを集めた新年祝賀会で「新（あたら）しき 年の始めの 初春の 今日降る雪の いや重（い）け吉事（よきこと）」

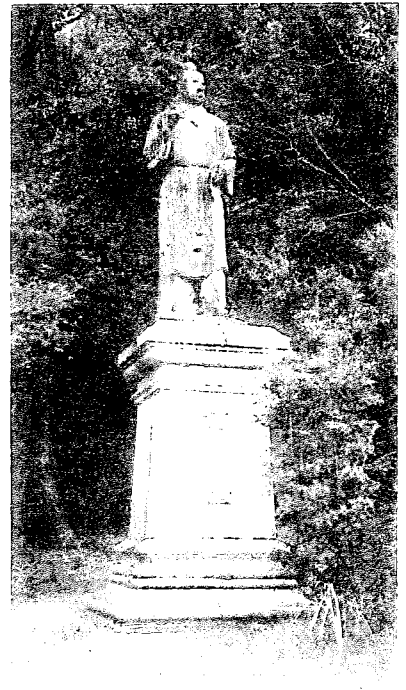
と詠んでいる。家持はこの歌を最後に、いっさい歌を歌わなくなった。『万葉集』の最後を飾る歌、万葉終焉（しゅうえん）の歌といわれている。彼はなぜその後歌を歌わなくなったのか。理由は不明であるが、諸説あるものの、おそらくそれ以降、『万葉集』二十巻の編纂に専念したのではないかと思われる。この歌の歌碑は国府跡の町役場近くに建てられている。

その後家持は、相模守、上総守、伊勢守、参議、右大弁、左大弁を歴任し、天応元年（781）従三位、延暦元年（782）、陸奥国按察使（あせし）兼鎮守府將軍、翌年中納言と昇進し、そして延暦四年（785）、陸奥国の多賀城において68歳の生涯を閉じている。

★岡益の石堂（おがますのいしどう）

国府町大字岡益に所在。地元の人が通称「いしんどう」と呼ぶこの謎の石造物は、因幡国府に近い細尾山と呼ばれる丘の上にある。

その構造は大きくは基壇・石囲・石塔部の三つの部分に分かれている。このうち中心にある石塔部は、基礎・竿石・中台・斗形及び移築部からなっている。これらの石はすべて凝灰岩の切り石が使われており、石塔部の基壇は一辺約6m、高さ1mである。その上に立つ竿石は、根元に蓮弁がめぐる円柱で、根元と頭部に比して中央部がややふくらんだ、いわゆる「エンタシス（銅張り）」になっている。その上に載せられた中台は縦1.2m、横1.8mで、その下半分の斗形には、「バルメット（忍冬唐草文 [にんどうがらくさもん]）」というスイカズラの葉に



《大伴家持像（富山県高岡市）》

似た文様が刻まれている。

これらのことから、この石堂は中国大陸や朝鮮半島の仏教文化の影響が強く認められる特異なものである。この石塔の円柱の回りには高さ2m、厚さ40数cmの板石が円柱を取り囲むようにたっている。

因幡の古文書である『勝見名跡志』には、寛文2年(1662)5月の大地震で石堂が倒壊したとある。同書に書いてある見取図には円柱上の斗形が大小3個のつており、現状と異なっている。またこの石造物は明治時代にも倒壊して修理されているが、その際、斗形の上に五輪塔の空風輪や宝篋印塔の笠など、本来この石堂がもっていなかったものが載せられていた(現在は元通りになっている)。

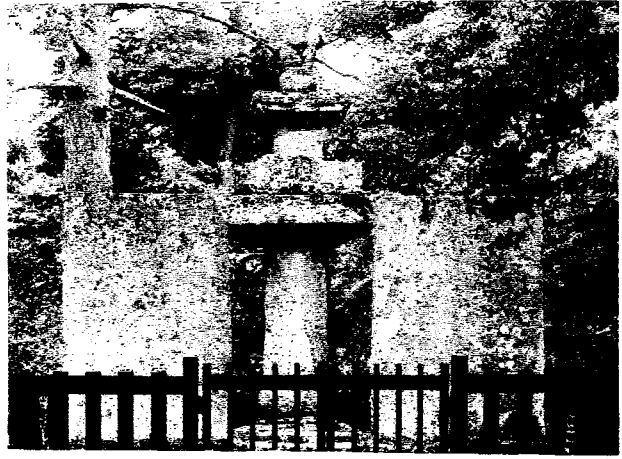
またもう一つ納得できないことがある。この岡益の石堂は明治29年(1896)に安徳天皇の陵墓参考地となっていることである。これは安徳天皇が壇の浦で敗れたのちに二位の尼とともに日本海を北上して因幡の国賀露の湊に上陸し、ここの岡益の地で隠棲中、お亡くなりになったとする落人伝説が江戸時代後期に生まれ、そして岡益の石堂が安徳天皇の墓だとされたことに始まっている。それを根拠に明治24年(1891)、地元の有志が1300人の連署をもって宮内省に建白し、その結果ここが陵墓参考地として指定された。したがって現在は宮内庁の許可なくしては、民間人は一切手をつけられない。

築造年代については、学者によってかなりの幅があるが、6世紀から7世紀後半という説で納まっている。それに対して壇の浦の合戦は元暦2年(1185)であり、納得がいかない。

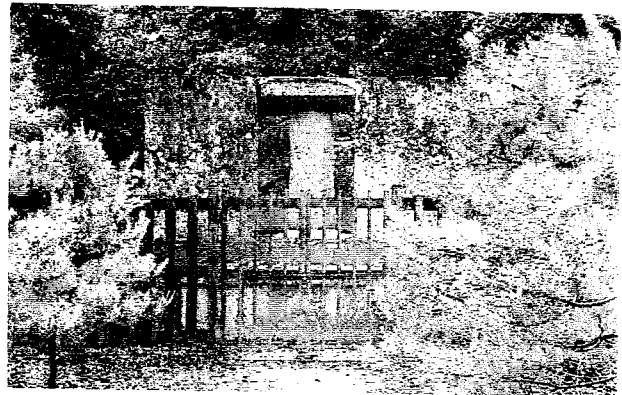
★岡益廃寺跡(おがますはいじあと)

岡益の石堂の後方一帯は雑木林になっている。ここからは布目瓦や須恵器の破片が出土して、白鳳時代や奈良時代の蓮花文の軒丸瓦等も発見されるので、ここら辺りに古い建物があつたことは間違いない。

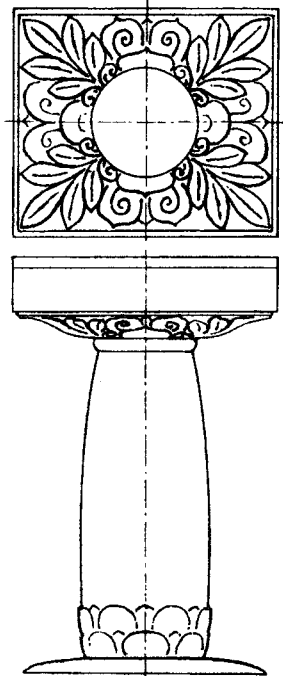
ただし、ここは上記のとおり、明治29年(1896)に安徳天皇の陵墓参考地となった時に、石堂のある土壇を造るために周囲一帯を掘り起こして平地にしたので、建物の基礎石などは昔の位置とは異なり、ばらばらに散乱している。ただこの建物は、あるいは岡益の石堂と対をなす古代寺院とも考えられて、一応ここは岡益廃寺跡とされている。



《修復前の岡益の石堂》



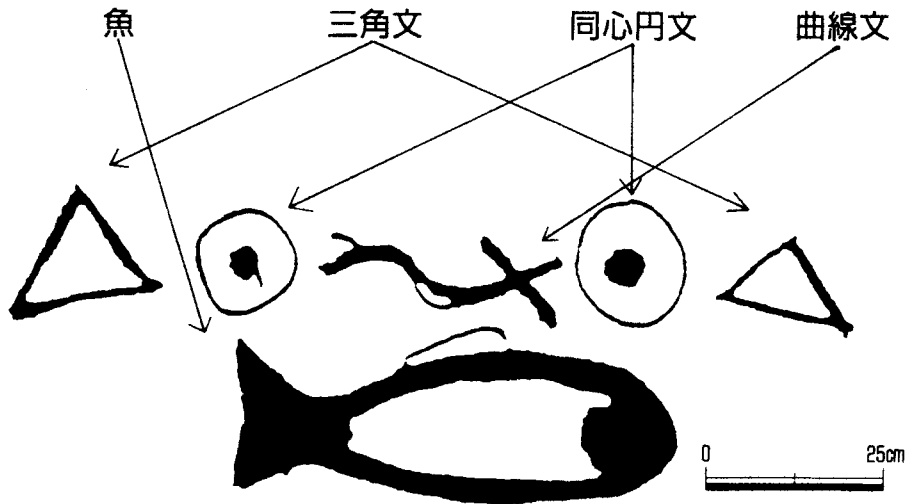
《修復後の岡益の石堂》



《主要部図(川上貞男氏作図)》

★梶山古墳 (かじやまこふん)

国府町大字岡益。
鳥取県内の壁画古墳は全部で50基を数え、その密度は全国一である。なかでも国府町内には11基もある。岡益の石堂近くにある梶山古墳は、極めて特異な変形八角墳であり、かつ彩色壁画古墳であって、昭和54年(1979)に国の指定史跡に指定された。またこの梶山古墳のすぐ北側には3基の円墳があり、また西側に6



《梶山古墳玄室奥壁の壁画模式図》

基、東側に4基の横穴墓群があつて梶山古墳群を形成している。

この古墳の築造時期は7世紀初頭とされている。墳丘は変形八角墳で径20m、である。南側に口を開いた横穴式の石室は全長8.8mで、羨道の封土は失われているが、その奥に前室と玄室がある。玄室は精巧に仕上げられた凝灰岩の切り石を用いて造られており、長さ2.4m、幅1.36m、高さ1.64mである。玄門扉をふさくはめこみが左右に造られ、下には扉をのせる台石がある。

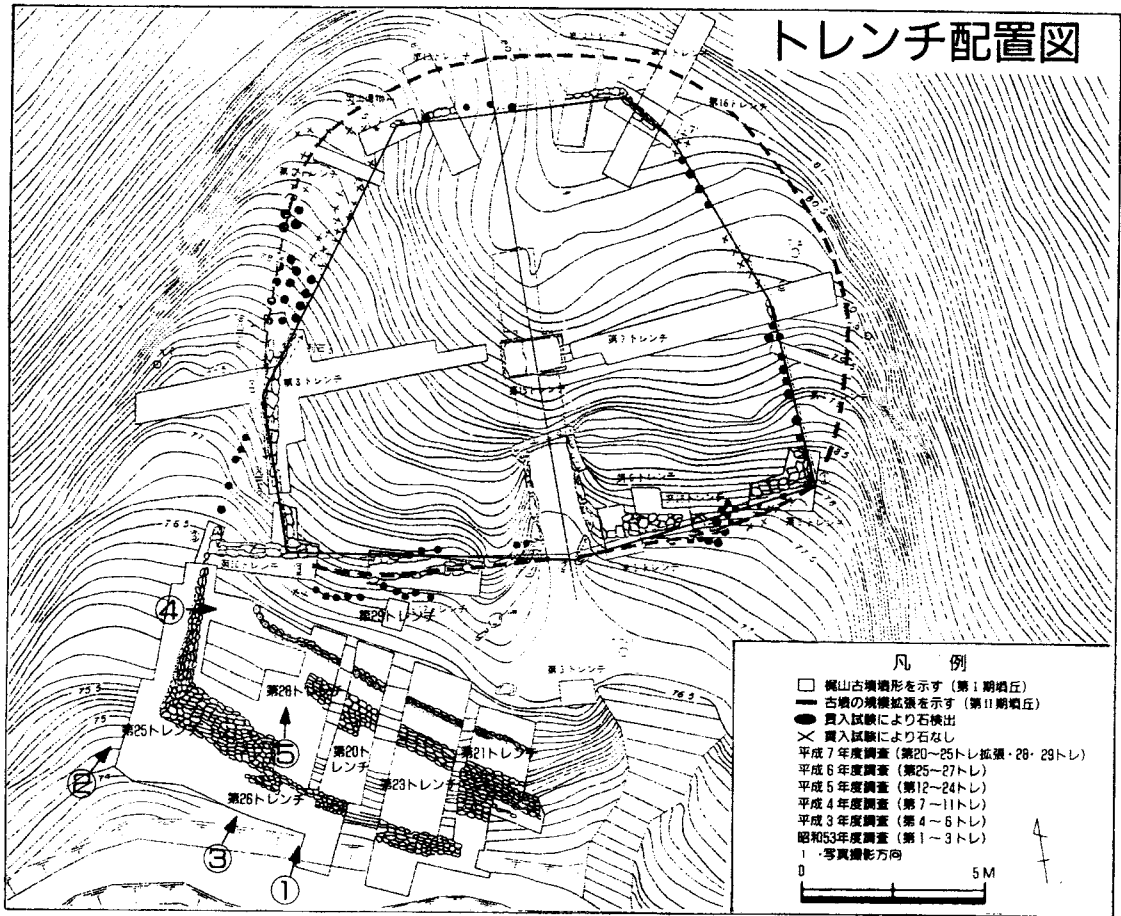
玄室の奥壁上半分に赤黄色の顔料で書かれた壁画は、両端に3角形、その内側にそれぞれ同心円があり、中央に曲線文があつて左右対象になっている。そしてこれらの中央下段に右向きで体長5.3cmの魚が太い線で書かれている。これまでに彩色壁画のある古墳は、九州の有明海沿い、北関東と東北南部、そして近畿地区に限られており、また魚が主体として描かれているのは福岡県の日ノ岡古墳とこの梶山古墳のみである。

この古墳のさらに大きな問題点は、八角形の古墳だということである。この時期には天皇家の血統の純粋性を誇示するために、八角墳を造るようになった。はっきりと八角墳だといえるのは、段の塚古墳(34代舒明天皇陵に治定)、御廟野古墳(38代天智天皇陵に治定)、野口王墓古墳(40、41代天武、持統合葬陵に治定)である。また、八角墳の可能性の高いものは、中尾山古墳(42代文武天皇陵に比定)、東明神古墳(文武天皇の父の草壁皇子陵に比定)、越岩屋山古墳(37代齐明天皇陵に比定)である。これらはすべて奈良、京都に所在するが、それ以外の地方では、中山荘園古墳(宝塚市)、神保一本杉古墳(群馬県吉井町)、尾市古墳(広島県新市町)と、この梶山古墳のみである。

この八角形はなにを意味するのか? 祭天思想説(斉藤忠氏)、陰陽五行説(吉野裕子氏)、儒教思想(網干善教氏)、道教思想説(多数)など諸説あつて、いまだ説明されていない。

またこの梶山古墳は、単独で考えるのではなく、さきの岡益の石堂、さらには因幡地方に散在する線刻画古墳や四隅突出型墳丘墓などに関連して総合的に考察しないとその謎は解けないであろう。

森浩一氏(同志社大学名誉教授)は、この地域の特異な文化について、この地方に日本海を媒体として直接大陸文化と結びつけた独自の文化圏があつたと説いている。これらは朝鮮半島北部の高句麗に源流があり、後の渤海(ほっかい)文化と融合した文明が、時計まわりに日本海経由で入ってきた、と強調されている。



《発掘調査中の梶山古墳》

★宇倍神社 (うべじんじや)

国府町宮下に所在する因幡一宮、延喜式内社、旧国幣中社。

宇倍神社も謎の多い神社である。祭神は武内宿禰である。これは「因幡国風土記」の逸文に「仁徳天皇の55年(368)3月、大臣武内宿禰は、御年360余歳で因幡国に下向され、亀金に双の履を残して行方知れずになられた。因幡国法美郡の宇倍山の麓にある神の社が武内宿禰の御霊である」とある。

武内宿禰の年令については諸説ある。平安時代に書かれた『公卿補任』は、「在官244年、春秋295年」、そして『扶桑略記』には、「大臣武内宿禰、春秋282歳にて薨じる。6代の朝244年を歴るなり」とする。その他312歳、307歳という説もある。ところが宇倍神社が創建されたのは大化4年(648)という。年代が300年余りも違う。

宇倍神社には、明治時代に北海道と東京に転出されるまでは、古代から代々伊福部氏が神官を務めてきた。同家に伝わる延暦3年(784)の『因幡国伊福部臣古志』という古系図によれば、初代は大己貴命、4代は天日鉾命で、14代の武牟口命が日本武尊に従って九州下向の途中、因幡国で反乱を平定し、そのままそこに居残った、とある。この武牟口命が、後世になって武内宿禰に誤り伝えられたという説もある。また伊福部という名前は、金属精錬のタタラの火を吹く「息を吹く部」からきたという説もあり、そうするとこの一族は砂鉄精錬の技術を持った渡来系の集団とも考えられる。

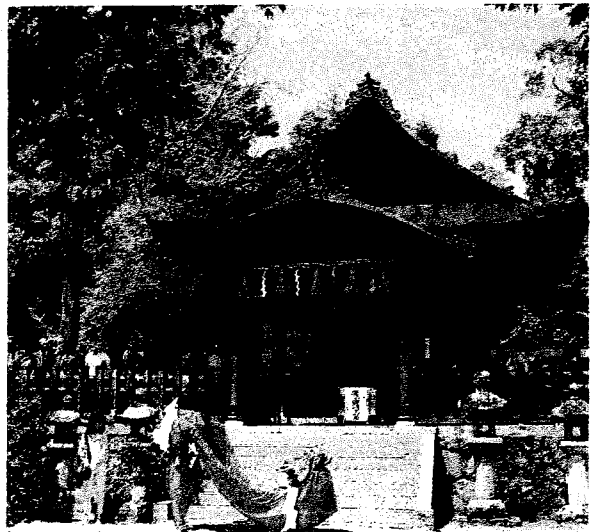
『三代実録』によると、宇倍神社は貞観4年(862)に正五位上(大國の国司クラス)になり、その後も年々昇進して元慶2年(878)には正三位(大納言クラス)になって高い社格を誇ったが、その後、天正元年(1573)に尼子勢に攻められ、山中鹿之助の焼き討ちにあい全滅した。伊福部氏はその間一時出雲大社に隠遁したが、慶安元年(1648)、鳥取城主の池田光仲が社禄25石を与えて社殿が復活した。

明治18年(1885)、日本で最初に発行された1円紙幣には武内宿禰の肖像画が印刷されている。また明治32年(1899)発行の5円紙幣には、この武内宿禰の肖像画とともに、流造檜皮葺の宇倍神社の社殿が印刷されている。

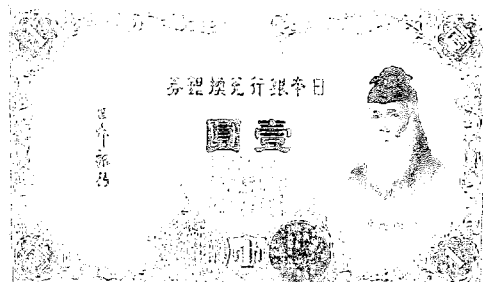
★亀金丘古墳 (かめがねおがこふん)

宇倍神社本殿背後の小さい丘の上にある古墳。丘の頂には双履石(そうりせき)という2個の石があり、これが武内宿禰がふたつの履(く)を残して昇天した霊地と伝えられている。

この古墳は「宮下第46号古墳」ともいう。直径14mの円墳で、5世紀前半のものと推定されている。この小丘は明治31年(1868)、社殿改築の際に敷地拡張のために切り崩され、さらに昭和17年(1942)にも社殿改築工事中に土砂崩れがおきて石室の一部が露出した。そ



《宇倍神社社殿と独特な麒麟獅子舞》



《1円札の武内宿禰肖像》

の石室は長さ2 m、幅と高さそれぞれ1 mの竪穴式で箱式の石棺が埋納されていた。

亀金丘を中心とした宇倍神社の境内では、明治時代と昭和28年(1953)にも銅鏡が発見され、また亀金丘で経筒や経巻なども出土することなどから、ここには古い時代から神祭りのための遺跡があったと推定されている。

☆稲葉山(いなばやま)

鳥取市と国府町の境界線にある標高248 mの山で、「因幡山」「稲羽山」とも表記し、「宇倍野山」ともいう。この山の南山麓には、国史跡の伊福吉部徳足比売の墓や、南方の平野には国府や国分寺、さらには一部ではあるが、条里型地割も残っている。そのような場所、また優美な環境などから、古代因幡の人々は歌心に誘われて多くの万葉歌を残している。百人一首の古歌、因幡国守在原行平の

「立ちわかれ 稲葉
の山の 峰に生ふ
る 松としきかば
今かへり来む」

の歌はあまりにも有名である。

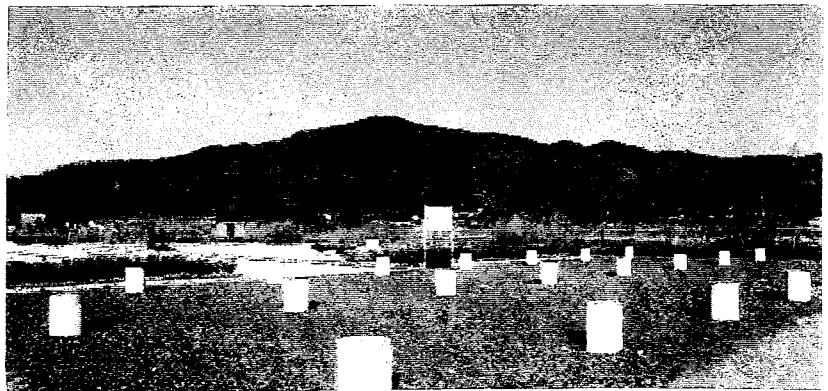
★鳥取池田家墓所(とっとりいけだけぼしよ)

岩美郡国府町奥谷にある鳥取藩主池田家11代の墓所。初代光仲が元禄6年(1693)7月7日鳥取城で逝去。鳥取城下近くに墓所を造ることとなり、調査のうえ現在地を候補地とし、同年7月10日普請奉行喜多村八兵衛が検分し最終的に決定した。以来明治に至る238年間、11代慶栄(はたか)までの歴代藩主と藩主室などを葬った。

広大な墓所には75基の墓碑のほか、多数の石灯笼を整然と配している。藩主墓碑はいずれも亀趺円筒型の壮大なもので、各種の墓碑とその配置から、江戸時代大名の葬法や墓制にみられる階層制を知ることができるなど、学問的価値が大きい。



《露呈した亀金丘古墳の石室》



《因幡国庁跡からた稲葉山》



《広大な鳥取池田家墓所》

昭和45年(1970)5月6日県指定史跡となった。またこの史跡の適切な保存と活用を図り、県民の文化的向上に資することを目的として、同年10月31日には(財)史跡鳥取池田家墓地保存会が設立された。その後、昭和57年(1982)10月31日付で国指定史跡となった。

★鳥取池田氏と初代光仲(とつとりいけだしとしよだいまつなか)

鳥取藩主池田氏について

「光仲公を初めとす。公の曾祖父信輝公(織田信長の乳母の子)に至り、池田氏初めて著れ、その子輝政公に至り、武勲を以て大に興る。孫忠継公、東照公の外孫として、別に備前を領し、新たに一家を成す。鳥取池田氏の祖とす」

と『鳥取藩史』は記している。光仲は忠継の弟忠雄の子で、母は蜂須賀氏の芳春院。幼名勝五郎という。

寛永9年(1632)、3歳で家督を相続。寛永15年(1638)、元服して光仲と改め、従四位下侍従兼相模守となる。寛永18年(1641)7月、12歳のとき「百日御暇」ということで、初めて鳥取へ帰城。正式な参勤交代は17歳のときからである。承応2年(1653)12月、左近衛権少将に昇進。貞享2年(1685)6月、家督を綱清(2代藩主)に譲り隠居。元禄6年(1693)7月7日、鳥取で死没。享年64歳。戒号を興禅院殿といひ岩美郡国府町奥谷の池田家墓地に葬った。

光仲は武道を重んじ、寛文～元禄期(1661~1704)には相容れられない為政者の一人であった。政務や家臣のためにはどんな苦勞もいとわなかったが、重臣に対する処置は非常に慎重で、大小にかかわらず自ら決済したという。

★橿谿神社(おうちだにじんじや)

水道山と大隣寺山に挟まれた谷間の王子谷にあり、もと因幡東照宮とよばれたが、明治7年(1873)に現在の名に改称された。この神社は慶安3年(1650)、鳥取池田家の初代光仲が日光東照宮を勧請して創建したもので、本殿・拝殿・幣殿はいずれも国の重要文化財に指定されている。

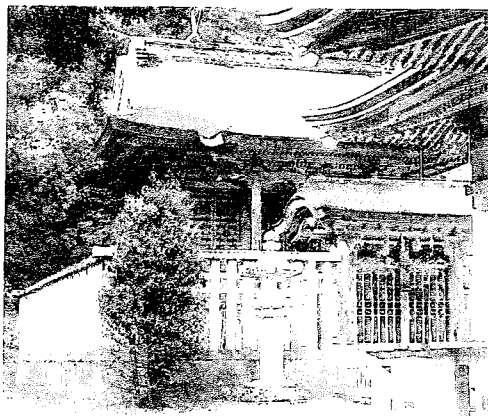
マツ・スギ・シイ・モミ・ツバキなどの古木が枝を交えて繁り合うなかに参道があり、神明造の鳥居をくぐり、石橋を渡って随神門にいたる石畳の両側には藩の重臣らが寄進した石灯ろうが並んでいる。

本殿は桁行三間梁間二間、一重入母屋造りで、唐門は一間一戸の平唐門、屋根は両方とも檜皮葺きである。拝殿・幣殿の屋根は柿(かき)葺である。用材はほとんどケヤキが用いられ、一部に彩色本漆塗りが見られるほかは白木造で、飾金具に桃山風のものが使われている。社殿全体のつりあい周囲の静けさにとけあって、江戸初期の神社建築の特徴を残している。

社室には、県指定保護文化財の銘「信濃国大塚(だいなう)藤原忠国」の太刀三口と銘「伯耆国倉吉住人播磨大塚藤原正綱」の太刀一口のほか、狩野探幽の手による三十六歌仙画像・鷹の



《池田光仲像(鳥取県立博物館蔵)》



《橿谿神社社殿》

図・池田光仲の着用した鎧(はろい)などがある。

また、池の右上に設けられた登山路を行くと、鳥取城包囲戦に際して豊臣秀吉が布陣した太閤ヶ平(たいこうがへら)に出る。途中には稲葉山・扇ノ山・鳥取市街・湖山池などを一望に収める展望地があり、秋・冬の空気の澄んだ日には、遥かに雪を頂いてそびえる大山の姿も遠望することができる。

*見学時間の関係で省略する場合がある。



《岩井廃寺の巨大塔心礎》

★岩井廃寺跡 (いわいはいじあと)

岩美郡岩美町にある白鳳時代から平安時代にかけての寺院跡。温泉で知られる岩井地区の北側の山裾に位置し、宇治地区との境界にもあたる。付近に残る弥勒堂・大門などの地名や地形などから判断して、現在の御湯神社境内から岩井小の校地辺りがその寺域と推定されるが、詳細は不明。現在は小学校(廃校になっている)玄関前に塔の心礎を残すのみである。心礎は3.6m×2.4m余りもある巨大な石で、上部に高さ3cm・一辺1.4m四方の柱座が設けられている。柱座の中央部には直径77cm、深さ32.7cmの柱穴と、直径20cm、深さ14.2cmの仏舍利孔が穿(う)かたれており、地元では「鬼の碗」と呼んでいる。

伽藍配置は遺物の出土状況、地形などから法起寺式が想定されている。出土遺物には、軒丸瓦、軒平瓦などがあり一部が岩井小にほか保管されていた。なお重要文化財に指定されている岐阜市芥見岩井の延算寺の薬師如来像は、縁起によると当地から平安時代に遷座したことを伝えており、注目されることである。塔心礎とその周辺は昭和6年(1931)、国の史跡に指定された。

*見学時間の関係で省略する場合がある。

★御湯神社(みゆじんじや)

岩美郡岩美町岩井にある式内社。祭神は大己貴命・御井命・八上姫命。俗に伊勢宮という。

『因幡誌』によると岩井村の河東の山下にあったとされる。社伝には祭神小彦名命の神廟が大野村の山麓にあったが、近世この地に移し、大野ノ宮ともいう。

『岩美町誌』によると、大己貴命は因幡の八上姫命をめぐり、9柱の子神を生んだ。第1子木俣命は御井命といい、その心身を清めたのが岩井温泉で、御井命をまつたのが同神社また宇治の朝臣が岩井に来て神女に教えられ、病を直したとも伝承している。弘仁2年(811)、宇治の長者と呼ばれた藤原忠久が一族の繁栄を願って創建したとも伝えられる。明治5年(1872)郷社となった。



《御湯神社随神門》

*見学時間の関係で省略する場合がある。

☆岩井温泉 (いわいおんせん)

岩美郡岩美町の国民保養温泉地(昭和48年[1973]指定)。「島の湯」「銀の湯」などと称せられ、古くから湯治場として栄えた。

清和天皇のころ(860年ころ)皮膚病にかかっていた藤原冬久が、神女に教えられ、この温泉を開いたという。



藩政時代には温泉は鳥取藩の所有となり、湯小屋も藩によって建築された。明治5年(1872)温泉とともに湯小屋が全部払い下げになり、区有となっている。戦前には県内温泉旅館宿泊数の半分以上を占める繁栄を示したが、山陰各地の新しい温泉地の開発と、再三にわたる大火のため旅館数も減少し、昭和58年(1983)には6軒で380人収容になった。この温泉には、湯治客が柄杓で湯の面をたたいて調子を取りながら湯かむり唄をうたう奇習があり、「湯かむり温泉」ともいわれる。泉質は石膏性苦味泉で、湯量は毎分約760リットルである。

★摩尼寺と摩尼山信仰 (まにでらとまにさんしんこう)

摩尼寺は、承和年間(834~47)、慈覚大師円仁が開いたと伝えられる天台宗の寺で、山号は喜見山、本尊は帝釈天である。縁起によると、湖山村の宇文長者が、円護寺の大日如来に祈念をこめて一女を得たが、娘が八歳の時、急に姿を消してしまったので、探しもとめたところ、竜女に化けて海上の雲霧で遊び戯れ、とうとう立岩の頂にあがって帝釈天になったという。

寺は標高300m余りの摩尼山の中腹にあり、山門まで高い石段が続いている。鐘楼を右に、籠堂を左手にして、本堂は山の中腹を切り開いて建てられている。奥の院はさらに上に登ったところにあるが、立岩とよばれるところがあり、そこが帝釈天出現の地といわれている。この寺は鳥取第一の霊場といわれ、6月26日から3日間にわたって行なわれる会式や、春秋の彼岸



《摩尼寺仁王門》

には多くの参詣客でにぎわう。また、旧暦8月15日の『へちま加持』は天台宗安楽律法流の秘法を厳修。喘息平癒の祈願に全国から信者が訪れている。

*2日目が雨天の場合、危険防止のため見学・参拝を中止する。

★玄忠寺 (げんちゅうじ)

詳しくは大唐大巖深心山九品院玄忠寺といい、宗派は浄土宗。本尊は恵心僧都作の上品下生の立像阿弥陀仏。永正5年(1508)、深心大忠によって開創され、以来28代の住職が継承している。開創以来3度の火災、政治によって寺は5回移転している。

寛文元年(1661)に現在地に移され、寛政12年(1800)4月の火災で建造物、古書類などの大半を焼失した。現在の山門、本堂、庫裏は文化元年(1804)に建立された。

境内には寛永11年(1634)11月、伊賀国鍵屋の辻で仇討ちを果たした剣豪・荒木又右衛門の墓がある。山門右手に荒木又右衛門遠品館、庫裏に高木啓太郎筆の羅漢の襖絵(ふすま)がある。



《羅漢絵の襖絵 (高木啓太郎筆)》

☆荒木又右衛門 (あらかまたえもん)

慶長4年~寛永15年(1599~1638)。

江戸初期の武芸者。伊賀国山田荒木村の人名は保和、本姓は服部氏。大和柳生で修行の後、大和郡山藩松平家に仕え、250石を給された。父親同士が旧知の仲だったことから、岡山藩士渡辺鞠負(ゆかり)の娘と結婚。

寛永7年(1630)、岡山藩主、池田忠雄の小姓、渡辺源太夫が河合又五郎に殺害された。又五郎は江戸の旗本の安藤家に逐電。又五郎の身柄をめぐって、旗本と外様大名の対立が深まり、当時の社会を二分するような険悪な事態となった。折しも池田忠雄が急死。調停に苦しんだ幕府は、幼君を擁する岡山藩を鳥取へ国替えさせた。この時、渡辺源太夫の兄渡辺数馬は藩に暇を乞い、義兄又右衛門の協力を得ながら、河合又五郎の行方を追った。寛永11年(1634)、荒木らは伊賀上野の鍵屋の辻で又五郎を討ち取り仇討ちを果たした。

寛永15年(1638)8月12日、池田家は兩人を鳥取に迎えて厚く遇したが、又右衛門は到着後間もない同月28日、40歳で死亡し、玄忠寺に葬られた。病死とも毒殺とも言われるが、真相は不明である。



《荒木又右衛門の墓 (玄忠寺)》

★景福寺 (けいふくじ)

応安5年(1372)、平尾越中守影勝の開基、通幻寂霊の開山と伝える曹洞宗の寺。慶長年間、

池田輝政の家臣荒尾志摩守隆重が中興し、のち池田氏の転封に従って姫路、岡山と移転、寛永10年(1633)、現在地に移された。

鳥取藩家老の倉吉荒尾家の菩提所で、現在境内には荒尾家二代宣就以降代々の墓がある。そのほか明治まで挽臼の墓といわれていた剣豪羽生郷右衛門の墓、大坂夏の陣で戦死した豊臣方の武将後藤又平衛基次夫妻の墓、鳥取藩絵師土方稻嶺、谷文晁の弟で画家でもあった藩士島田元旦らの墓がある。

★後藤又兵衛の墓 (ごとうまたべいのはか)

景福寺境内の一角にある二つの大きな五輪塔が、大坂城攻防戦で勇名を馳せた後藤又平衛夫妻の墓である。

又平衛は幼少より黒田如水(はすい、官兵衛、孝高[はたか])に可愛がられたが、如水の死後、その子長政に嫌われ、筑前を立ち退いた。慶長19年(1614)の大坂冬の陣では豊臣方の招きに応じて籠城した。上杉・佐竹の軍勢を破るなどの活躍をしたが、翌元和元年(1615)、夏の陣で、大坂道明寺で戦死した。その時又平衛の子為勝は2歳であったが、母に抱かれて鳥取に逃れ、成長して池田光仲に仕えた。三浦姓を名乗ったが、その子の正敏は長ずるにおよんで祖父の武名を慕い、墓を建立して石碑にその事跡を刻んだ。

★鳥取県立博物館 (とっとりけんりつはくぶつかん)

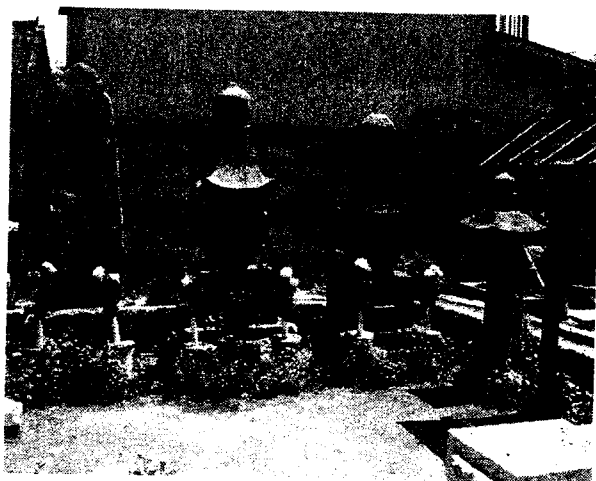
昭和47年(1982)、当時西日本一の規模を誇る総合博物館として開設された。鉄筋コンクリート3階建、建物のべ面積は9699m²である。

鳥取県に関係の深い考古・民俗・美術・資料や、旧県立科学博物館が20年余りにわたって収集した地学・生物学の自然化学資料を常設展示している。

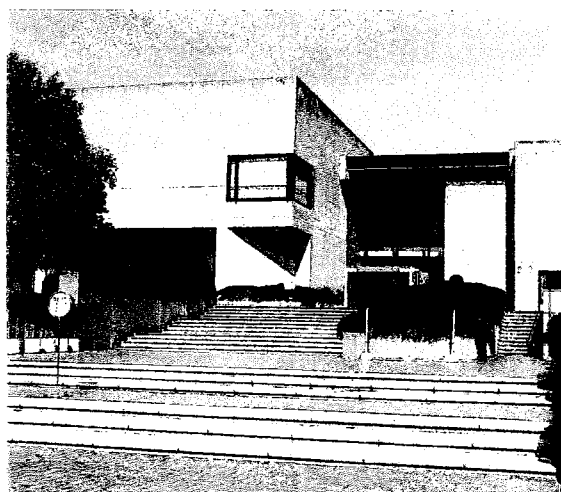
主なものには、県内の山間部に棲



《景福寺本堂》



《後藤又兵衛夫妻の墓》



《鳥取県立博物館正面玄関》

息するオオサンショウウオの生態展示や、鳥取藩政史料15000点、また、江戸時代の土方稲嶺(とうがい)作の紙本墨画雲籠図、黒田稻卓(くろこう)作の紙本墨画群游泳図(ともに県文)などの絵画、美術品も多い。

今回の探訪は、時間の関係で自然史資料室は省略し、考古・歴史関係の展示を中心に見学するようにするのでご協力をお願いしたい。

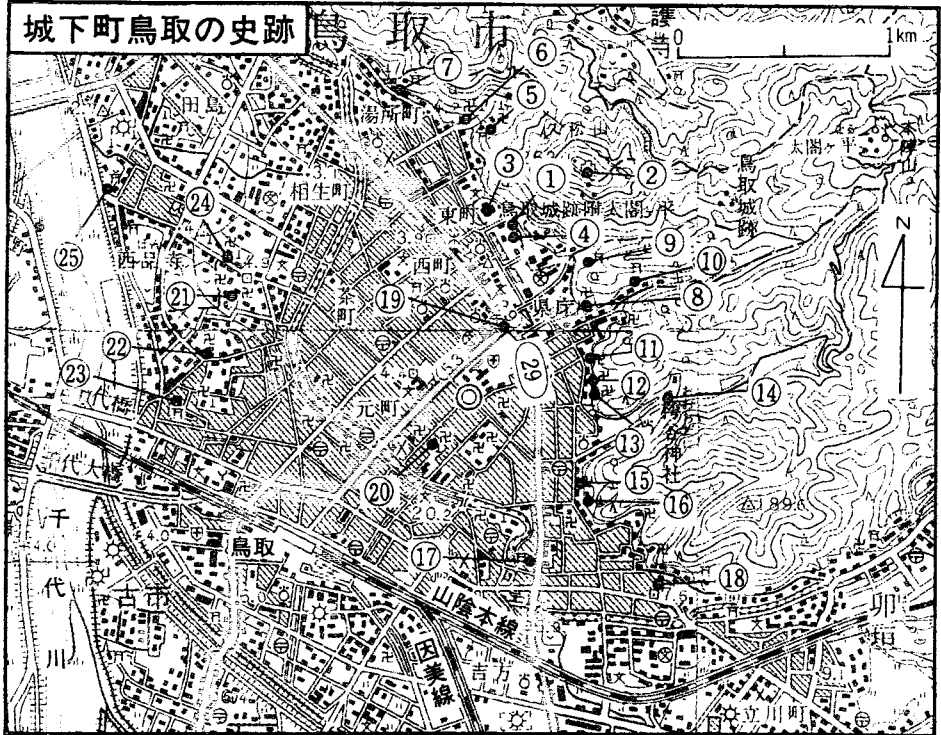
★鳥取城とその歴史(とっとりじょうとそのれきし)

鳥取市東町にある近世城郭。昭和32年(1957)、国指定史跡。

鳥取駅の正面に見える標高263mの久松山(きゅうしょうざん)一帯が城内で、山頂に築かれた山上の丸と、西麓の山下の丸、濠の三つに分かれている。

今回の探訪では山下にある二の丸の一部を見学し、晴天の場合はここで昼食弁当をとる。

鳥取城は天文14年(1545)、因幡守護山名氏14代誠通(まこと)が布施天神山城(鳥取市湖山池町南)の出城として山頂



- | | | | |
|-------------|----------|---------|----------------|
| ① 鳥取城跡 | ⑦ 赤松八幡宮跡 | ⑭ 樗谿神社 | ⑳ 景福寺 |
| ② 山上ノ丸 | ⑧ 興禅寺 | ⑮ 観音院庭園 | ㉑ 常忍寺 |
| ③ 鳥取県立博物館 | ⑨ 長田神社 | ⑯ 広徳寺 | ㉒ 聖神社 |
| ④ 仁風閣・宝隆院庭園 | ⑩ 栗溪神社 | ⑰ 前田神社 | ㉓ 玄忠寺・荒木又右衛門の墓 |
| ⑤ 最勝院 | ⑪ 日香寺 | ⑱ 大雲院 | ㉔ 斬刑(場)地蔵 |
| ⑥ 天徳寺 | ⑫ 大隣寺 | ㉕ 尚徳館碑 | |
| | ⑬ 芳心寺 | ㉖ 一行寺 | |

部に山上の丸を築いたのが初めとされる。当時誠通は、同族の但馬(兵庫県)守護山名祐豊と争い、その来攻を防ぐためにこの城を築いたが、城が完成して3年後の天文17年(1548)、祐豊の攻撃を受けて天神山城は落城、誠通も戦乱のなか陣没した。

誠通のあとには祐豊の弟、豊定が天神山城に入って因幡山名氏15代を継ぎ、以後16代豊数(豊定の子)・17代豊国(豊数の弟)と続き、天神山城を引き続き本拠とした。鳥取城には城番として家臣の武田高信が入ったが、高信は主家に背いて永禄7年(1564)、天神山城を攻撃。これにより当主豊数が戦死するなど、山名氏は苦境に陥ったが、天正元年(1564)、豊国は毛利に滅ぼされた尼子氏の遺臣山中鹿之助の助けを受け、鳥取城を逆襲して武田高信を追い、以後鳥取城を本拠とした。

このころになると、毛利氏一族の吉川元春の勢力が山陰道を東漸し、山名豊国もその麾下

に属することになったが、天正8年(1580)、羽柴秀吉の因幡攻めが始まると、豊国は簡単に秀吉に下ってしまった。

この豊国の態度を不服とした鳥取城の家老森下・中村らは豊国を追い出し、吉川元春に鳥取城の城督(城番)の派遣を求めた。これを受けて元春は石見国福光(島根県瀬摩郡温泉津町)の福光城主吉川経安の嫡男経家を鳥取に送った。

秀吉の鳥取城攻めが始まったのは天正9年(1581)6月で、その軍勢は2万とも3万ともいわれる。これを迎える鳥取方は久松山上に経家、山麓に中村・森下など山名の遺臣が陣を敷き、出城の雁金城に塩冶周防守、丸山城に奈佐日本之助を配し、百姓・町人を交えて総勢約3400名であったと伝えられている。

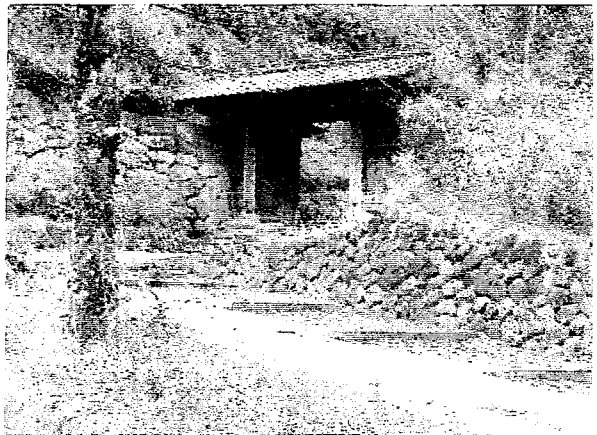
城兵の激しい抵抗を予想した秀吉は、激しい包囲網を敷いて兵糧攻めの作戦をとった。いわゆる「鳥取の湯殺」である。絶望的な防戦の後、経家自らを含む守将3名の自決という条件で降伏したのは、約5ヶ月後の10月25日のことである。部下の助命を願って深く自刃した経家は「とつとりの事、夜昼二百日こらへ候。兵糧つきはて候まま、我ら一人御用にたち、おのおのたすけ申、一門の名をあげ候」と、悲壮な遺書を福光にいた4人の子供たちに書き残したが、このことは戦国の美談としていまに語り継がれている。

その後、鳥取城は城攻めに功のあった宮部善祥坊(継潤)に与えられ、5万石を領したが、その子民部少輔(みんぶのしょう)が関ヶ原の戦いで西軍についたため城と領地は没収され、新たに池田長吉(恒興の3男、輝政の弟)が6万石で入封した。

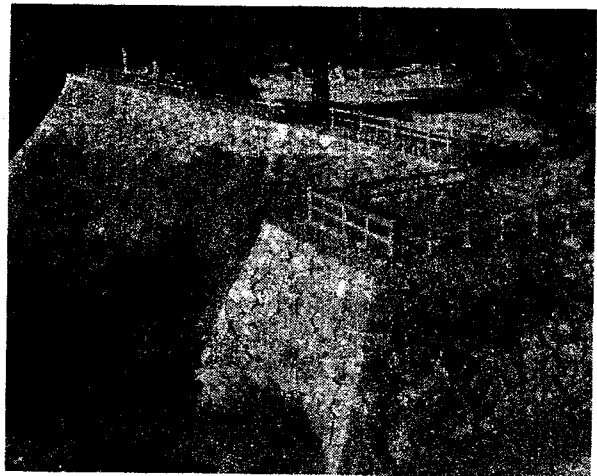
長吉は山上の住居が不便なため、中腹に二の丸を築いて城地を広げ、外堀を拡張したが、元和3年(1617)、池田光政(輝政の孫、利隆の子)が姫路50万石から因伯32万石の城主として国替えになった。光政は袋川を南に押し出し、その懐に3重の防御線を構築したが、寛永9年(1632)、岡山に移り、代わって岡山から従兄弟の光仲が入封し、その子孫が明治維新まで続いた。

維新後、陸軍省の所管となり、明治12年(1879)に建造物はすべて壊されたが、山上に天守閣跡・月見櫓跡・車井戸跡、西麓に二の丸跡・天球丸跡・馬場跡などの石塁や石垣が残っており、昔を偲ばせる。

鳥取城の関連文書は『池田家文書』として県立博物館に所蔵されているが、その中で絵図面がある。ここで注目すべきは天守閣焼失の元禄5年(1692)以前のもので、天守閣と二の丸お三階櫓の記入である。天守閣の屋根は茶色、お三階櫓の屋根は水色に塗られている。すなわち、天守閣は柿葺(にがらびき)で、お三階櫓は瓦葺であったことを物語っている。城の重要な建



《鳥取城二の丸城門》



《鳥取城二の丸石垣》

物が瓦葺でない例は、全国的に見て日本海岸の寒冷降雪の多い地方にあった。鳥取城の天守閣はその数少ない例である。

現在、城跡は久松(きゅうしょう)公園になっており、県立博物館などもあって市民の憩いの場として親しまれている。その遺構は戦国争乱期の山城から近世の平山城・平城への移行過程を示すものとして学術的に貴重とされ、東方の秀吉が陣を構えた太閤ヶ平(たいこうがへら、本陣山)を含めて国史跡に指定されている。

☆吉川経家(きつがわつないえ)

天文16年(1547)～天正9年(1581)10月25日。

戦国時代の武将。吉川氏の支族で、石見国福光城(鳥取県漣摩郡温泉津町)の城主吉川経安の嫡男。幼名は千熊丸、通称は小太郎。永禄3年(1560)から永禄9年(1566)にかけ、毛利の両川の一員として尼子攻めに参加、初陣は14歳である。この間の戦功により、永禄11年(1568)正月5日、式部少輔(しきぶのしょう)に叙任。天正2年(1574)、父の跡を継ぎ、吉川元春の麾下にあって毛利氏の中国制覇に貢献した。

天正9年(1581)、因幡鳥取城督(じょうとく、城番)に選ばれて入城。旧城主山名豊国は毛利氏に背いて織田信長に下ったが、その家老や因幡国の国人らはこれに反発し、豊国を追放した。彼らに迎え入れられた経家は、今田宗与、朝枝春元ら400名を率いて同年2月26日、福光城を奔った。このとき首桶を用意し、近習に持たせたという。その後、月山富田城で元春と面会、3月18日午前10時、織田・毛利の2大勢力がせめぎ合う要の城に入った。

鳥取城は標高264m久松山(きゅうしょうざん)上にあって要害堅固、北方には雁金城・丸山城を新たに築き、千代川・日本海を経て温泉津の泊港に連絡できるようにした。籠城の兵士は約1400人、農民らの雑兵を加えると約3400人であったという。

天正9年6月25日、2万(3万とも)を越す大軍を率いて姫路を奔った羽柴秀吉は、7月12日、鳥取に到着。厳重な包囲網を敷いて兵糧を断った。おりから吉川元春は伯耆の南条元統と戦い、また毛利輝元、小早川隆景もそれぞれ備中、美作で転戦中で、救援は望めなかった。5ヶ月にわたる籠城の末、城内の食糧が底をついて防戦不可能とみた経家は、一身の犠牲をもって城兵の命を救うことを条件に開城した。

そして天正9年10日25日、久松山西麓の真教寺で自刃して果てた。死に先立って、吉川経言(つとむ、広家)、父経安、嫡子亀寿丸(経実)、秀吉らに宛て計8通の遺書をしたため、死後の処置を事細かに指示するとともに「日本二ツ之御弓矢(織田と毛利)」の場で切腹するのは末代までの名誉と記した。享年34歳。

この壮烈な最期に家臣3人が殉じている。経家の墓は岩国市横山の洞泉寺にあるが、久松山の裏手の円護寺にも、経家と殉じた家臣の墓と伝えられる五輪塔2基が残されている。法名は「平等院前史部寂輔空心大禅定門」、時勢の歌は次のとおり。

「君が名を あだになさじと思ふゆへ 末の世までと残し置かな」

「いにしへの かりの庵とすみかへて もとの都にかへれりこそすれ」

なお、平成5年(1993)の命日に鳥取城の堀端に「吉川経家公銅像」が建立され、ゆかりの地である岩国市の関係者により除幕式が行われた。この像は高さ2.5mの立像で、両腕を下ろし右手に采配を持ち、久松山を背にして高さ1.8mの台座に立ち鳥取市街地を見渡している。経家の肖像は残っていないので、直系子孫の当主の顔写真をもとに、鳥取市出身のイラ



《円護寺に伝わる吉川経家主従の墓》

ストレーター毛利彰氏が原画を描き、これをもとに東伯郡北条町在住の彫刻家奥谷俊治氏が原画を制作したものである。

★仁風閣 (じんぷうかく)

鳥取市東町。久松公園 (きゅうしょうこうえん) 内にある。明治40年 (1907)、当時皇太子であった大正天皇の山陰行幸の宿舎として、旧鳥取藩主家の池田仲博侯爵が建てたものである。

明治39年 (1906) 10月起工され、明治40年5月に竣工した。設計は明治の3大宮廷建築家の一人で、迎賓館、赤坂離宮、京都国立博物館などを設計した宮内庁匠頭 (技師長)、片山東熊 (とうゆう) である。また、施行にあたっては工部大学校で片山の後輩にあたる、鳥取市出身の橋本平蔵が監督した。

建物はフレンチ・ルネサンス様式を基調とした北面する木造瓦葺2階建てで、建築面積は491.5m²。バロック風な軒飾りをほどこしてあり、東側には8角尖塔型の階段室が敷設され、また、正面には玄関ホールが設けられている。

また、室内マントルピースのための赤レンガ煙突は、瓦屋根にいいしれぬ変化をもたせて当時の建築様式を裏付けており、背面は1、2階とも吹き放しのベランダを設け、ルネサンス様式独特の品格を表現している。

仁風閣の命名は皇太子に随行した東郷平八郎 (当時海軍大将) で、いまもその直筆が2階ホールに掲げられている。建設費は4万4千円である。当時の鳥取市役所の年間予算が5万円なのでいかに巨額の費用であったか分かる。また、仁風閣の室内にはシャンテリアがあるが、これは鳥取県内で初めてつけられた電灯だというエピソードもある。

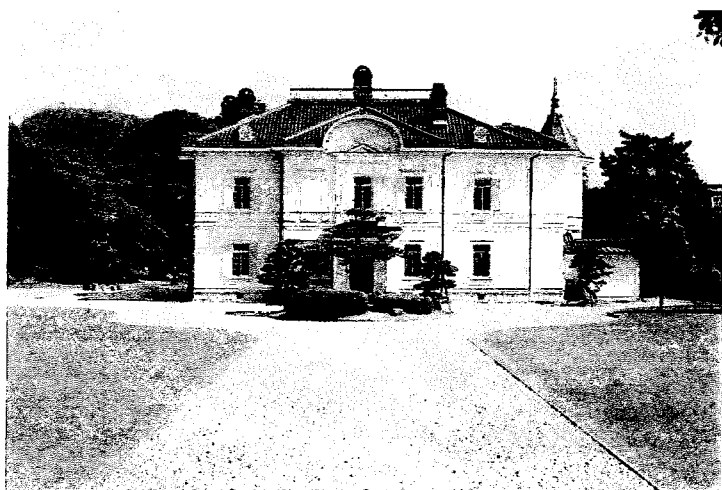
この建物は昭和24年 (1949) から昭和47年 (1972) まで、鳥取県立科学博物館として使用されていた。昭和49年 (1974) から3年かけて約2億円で修復を行い、昭和51年 (1976) から一般公開された。また、今春にも修復工事が完了し、今回、真新しい内部を見学できる。

仁風閣は山陰地方には数少ない明治洋風建築として貴重なもので、昭和48年 (1973) 6月2日、重要文化財に指定された。

☆宝隆院庭園 (ほうりゅういんていえん)

鳥取市東町。久松公園 (きゅうしょうこうえん) 内、仁風閣の裏手にある。江戸時代末期の文久3年 (1863)、鳥取藩第12代藩主池田慶徳 (よしのり) が、第11代藩主慶栄 (よしか) の未亡人宝隆院 (整子の受戒号) を慰めるために造った池泉回遊式の庭園。庭園名もこれによる。

整子 (初めは延子) は天保5年 (1834)、分知家の東館 (松平) 仲津を父として生まれ、幕府の命で10代慶行 (整子の実の兄) の養女となり、嘉永元年 (1848) 15歳で慶栄と結婚した。しかし、2年後慶栄が逝去したためわずか17歳で未亡人になった。文久2年 (1862)、幕府の許しをえて整子は鳥取に帰国したが、このとき、若い義母のため義徳は江戸浜町にあった扇御殿を移築して庭園を造ったのである。しかし、維新後の明治4年 (1871) には宝隆院はこの屋敷を去ることになる。そしてこの御殿も明治11年 (1878) の鳥取城取り壊しのさい姿を



《仁風閣 (正面より)》

消し、庭園だけが残ることになった。

宝隆院は昭和18年の(1943)の鳥取大地震以来、手入れされず荒廃していたが、昭和47年(1972)に修復工事が実施され、面目を一新した。久松山(きゅうしょうざん)を背景にして、自然林を巧みに活かした溪流の岩組に滝口を構え、ツルを模した池には亀島が浮かんでいる。海辺をめくり、深山幽谷の趣のある密林をくぐり、山間のせせらぎを構想して四季折々の景趣を十分に活かしており、江戸時代末期の関係された造園形式を見ることができる。



《仁風閣全景(左手の繁みが宝隆院庭園と茶室宝扇庵)》

仁風閣の2階からもよく見えるが、もし時間が余れば、現地に赴いて見学する。

◇観音院(かんのいん)

鳥取市上町にある天台宗の寺院。山号は補陀落山(ふだらくざん)、寺号は慈眼寺。本尊は正観音菩薩で、中国三十三観音霊場32番札所でもある。

寛永9年(1632)、池田光仲国替えにあたり、備前岡山の光珍寺の高僧寺伝がともを命じられ鳥取に来住、城下栗谷(くりたに)に祈願所観音寺を建立した。その後、慶安2年(1649)からの鳥取東照宮勧請にあたり、栗谷が御用地となり、観音寺は現在地を拝領して観音院と改称した。

光仲はことのほか観音菩薩を尊崇したが、綱清の時代に祈願は一時中断、宝永6年(1709)改めて観音院へ祈祷が命じられ、2年後銀1枚米10俵が給された。その後享保2年(1717)には、池田吉泰の嫡男宗泰の誕生にあたり、寺領60俵となった。寺格は藩から厚遇される8ヶ寺のひとつで、札席は最勝院の次と定められていた。

当院にある武家書院蓬萊式庭園の様式をとる庭園は池泉鑑賞式庭園として有名で、国名勝に指定されている。また境内の切支丹灯籠は県指定の文化財である。

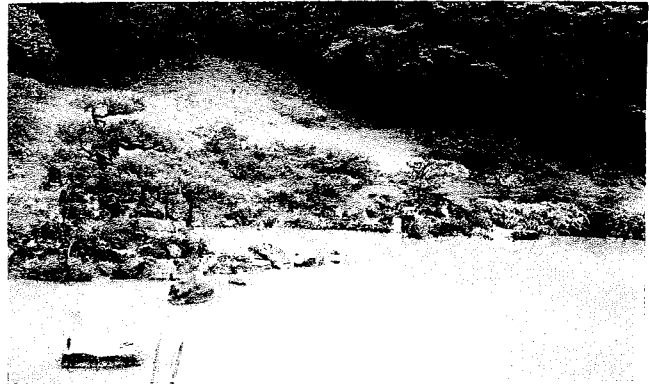


《観音院山門》

*2日目雨の場合、この観音院で昼食をとる。

◇観音院庭園 (かんのんいんていえん)

観音院は初代藩主池田光仲が岡山からの転封に際し、粟谷(あはに)からさらに上町に移したものである。そのため池田家との関係がことのほか強い。庭園は18世紀初頭に築造されたものと推定されている。



《観音院庭園 (国名勝)》

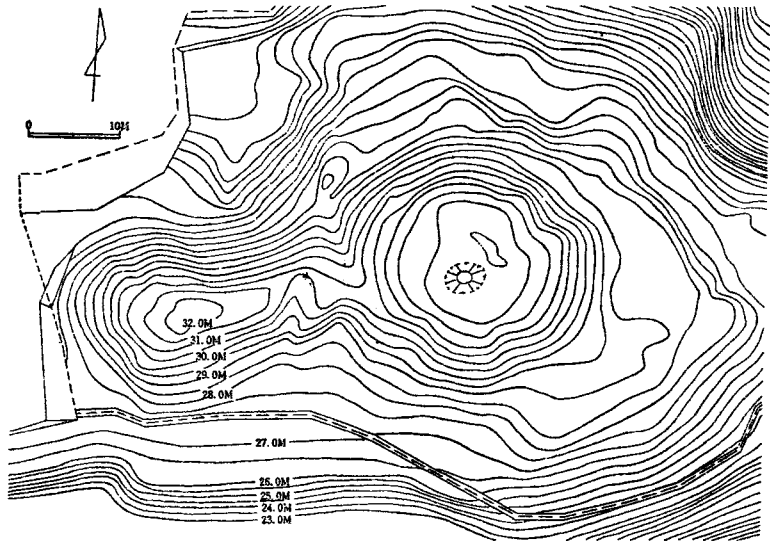
書院の南東から西に広がる自然の傾斜地を利用した池泉鑑賞式庭園で、庭の半分を池に、残り半分を築山としている。蓬莱庭園の様式をとる池中には、亀島・鶴島を配している。亀島は右手に亀頭石を有し、左手に集団石組を行い、亀島に鶴島を乗せた手法をとっている。亀島の側面には夜泊石、さらに奥には滝組がある。鶴島は南東部出島の部分にあたる。

鳥取地方に野生するシラカシ・ツバキ・シイ・クロマツ・ラカンマキ・アオキ・モチノキ・ナンテンなどを植栽して刈り込まれた庭園は、全山なだらかな芝生の築山と調和し、優美な景観を呈している。江戸時代、京都風の庭園の地方化したものの一適例として昭和12年(1937)12月、国名勝に指定された。

★布施古墳 (ふせこふん)

鳥取市大字布施字大段に所在する前方後円墳。昭和47年(1972)民間企業が宅地造成のため立木を伐採し、初めて古墳の所在が確認された。昭和49年(1974)国史跡に指定された。

古墳自体は原形をよくとどめている。湖山池東岸の標高30mほどの独立丘陵上にある立地し、前方部を東に向ける。全長約59m、後円部径約30m、高さ約6m、前方部幅約20m、高さ約5mである。



《布施古墳墳丘実測図 (『鳥取県文化財調査報告書第11集』から)》

外表施設として葺石が葺かれ、円筒埴輪も確認されている。埋葬施設については未調査のため不明であるが、後円部頂上に盗掘の痕跡があった。その周辺には土師器片・須恵器片の少量散布があり、こ

のとき採取された須臾器などから、6世紀前半代の築造と推定されている。なお、くびれ部には陪家らしき土盛が認められる。

湖山池周辺に密集して分布する古墳のなかでは、柄間(かま)第1号古墳(全長9.2m)に次ぐ大きなもので、大熊段第1号古墳などとともに中核的存在である。湖山池を中心とした交通・生産基盤を管掌した首長墓と考えられている。

★日吉神社(ひえじんじや)

「ひよしじんじや」ともいう。湖山池東岸、布施の卯山(うま、宇山とも)中腹にある。祭神は大己貴命・大山祇命・猿田彦命。近世末までは「山王権現」と呼ばれ、「布施山王社」とも称された。創立年代は不明だが、因幡守護山名氏が、近江国日吉大社の分霊を勧請したと伝えられる。

天正8年(1580)、羽柴秀吉の因幡侵攻のさい兵火で社殿は焼亡、神領も没収されたが、亀井茲矩(このり)が鹿野城(鳥取県鹿野町)城主として高草郡を領すると、社殿を再建、社領を寄進したという(『鳥取県神社誌』)。

鳥取藩政期には社領1石6斗余だった。藩主池田家の祈祷所として長日祈祷を執行、文化13年(1816)などの社殿再建・修理や遷宮のさいには、職人派遣・粮銀寄付などの援助が与えられ、しばしば代参や一族の参詣が行われた。

明治3年(1870)の「因伯寺社領取調帳」には、「布施社」とあり、同年12月の「在方諸事控」には「日吉社」とあるのでこの間に改称されたい。明治5年(1872)に郷社に列したが、同年11月村社となった。

例祭日は5月15日。小児守護・疝(かん)のおさへの神として崇敬され、社殿前の「くくり猿」を持ち帰ると子供の病気が平癒するといわれている。戦前は例祭日に2万人以上の参詣があり、山陰本線に臨時列車が増発されるほどであったという(『鳥取県神社誌』)。

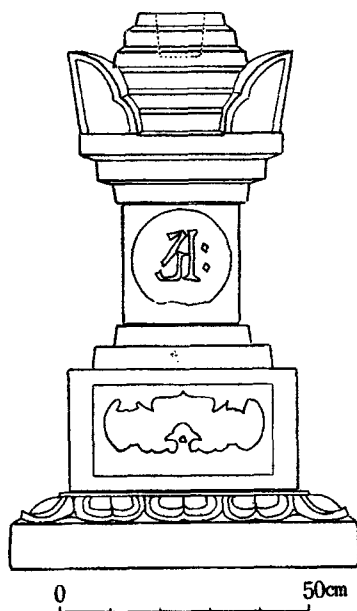
☆日吉神社宝篋印塔(ひえじんじやほうきょういんとう)

「山王社宝篋印塔」ともいう。この宝篋印塔は『因幡民談記』の「布施城(天神山城)図」に「ホヒロ(ヒ)五リン」として山王社参道の北側に図示されているが、もちろん正しくは五輪塔ではなく、宝篋印塔である。

現在この塔は日吉神社社務所の裏山斜面にある。『因幡志』に「近年社司の後園に安んず」とあるのは、現在地と考えられ、参道北側から移転して約200年経過している。

宝篋印塔は花崗岩製であるが、相輪部を欠損しており、表面も風雨に打たれ、かなり摩耗している。細部をみると、基礎の上に見事な反花座(かえりばせ)をもつ。連弁は複弁で、なお鎌倉時代の伸びやかさを保ち、花卉の「むくり」はまだない。基礎は幅46cm、高さは24cmと安定性があり、その上に2段の段形がつく。基礎側面は周囲に輪郭をとり、内に文様がある。摩耗しているが、複雑な「中心飾付格狭間」であることは間違いない。この格狭間は但馬・丹波・丹後地方の特色で、この宝篋印塔の存在は因幡と但丹地方とを結ぶ文化的例証として大きな意義があり、市指定の文化財となった。

塔身は幅23cm、高さ24cmだが、移転のさいに間違えたものか、現状では逆さに置かれている(挿図は訂正して描いている)。四面には月輪(がしりん)で



《日吉神社宝篋印塔実測図》

囲まれた金剛界四仏の梵字（ぼんじ、種子[しゆじ]）が刻まれている。笠は下2段、上6段の標準的な段形だが、「ころび」や「のり」の度合いが多いのが特色である。隅飾は2弧で、輪郭を巻き、やや外側へ傾斜する。笠石の幅は40.5cmとやや狭く、塔全体として横幅と比して背が高い印象を受ける。以上は鎌倉時代から南北朝期への変化であり、とくに中国地方の宝篋印塔にその傾向が顕著である。

これらのことから製作年代は南北朝期前期から中期にかけてのものと考えられている。現在の反花座15cm、塔自体の高さ94cmに、欠損した相輪の高さを約70cmとして復元すれば、総高180cmほどの宝篋印塔になる。

★布施天神山城跡（ふせてんじんやまじょうあと）

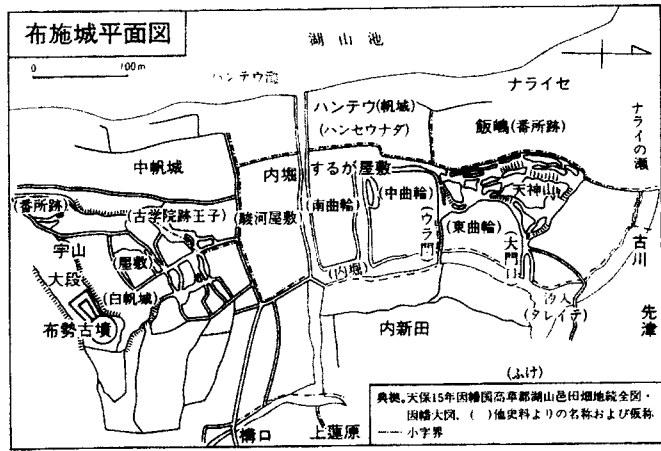
鳥取市湖山池町南3丁目に所在する中世から近世にかけての平山城跡。鳥取県指定史跡。

文正元年（ぶんしょうがねん、1466）山名左衛門佐勝豊が二上山城（鳥取県岩美町岩常）から移り、因幡守護山名氏の本城とした。単に「天神山城」「布施城（布勢城）」ともいう。主郭には3層の天守櫓が建てられていた。

湖山池東岸の天神山（標高25m）をめくって内堀が造られ、湖山池の水が導入されていた。内堀の南北は約400m、東西は約300mもあり、ほぼ矩形である。さらに、総延長約2.6kmの外堀をもち、堀内に面積約84haを包含していた。城郭内外の交通路としては、大橋・鐘手橋・九相橋・築地橋によってつながっていた。郭の内部には侍屋敷・町屋・寺屋敷があった。

天文14年（1540）、山名誠通（まことみち）のとき、鳥取久松山（きゅうしょうざん）に出城が設けられ、但馬山名氏に対抗した。天文17年（1543）但馬の山名祐豊（すけとよ）の急襲を受けて天神城は焼かれ、誠通は乱戦のなか討ち死にした。その後、但馬と和睦し、山名豊国のとき、鳥取城を支配していた城番武田高信を山中鹿之助幸盛の力を借りて破り、豊国は天正元年（1573）鳥取城へ移り、天神山城は廃された。

昭和40年（1965）、県立鳥取農業高校新築工事の際、発掘調査が一部実施されたが、主要部の大半は破壊された。このさい多量の土師器・磁器・櫛・古銭・井戸枠・住居跡等が発見された。



《天神山城全景》



《天神山城山頂の平場》

☆因幡守護山名氏 (いなばしゅごやまなし)

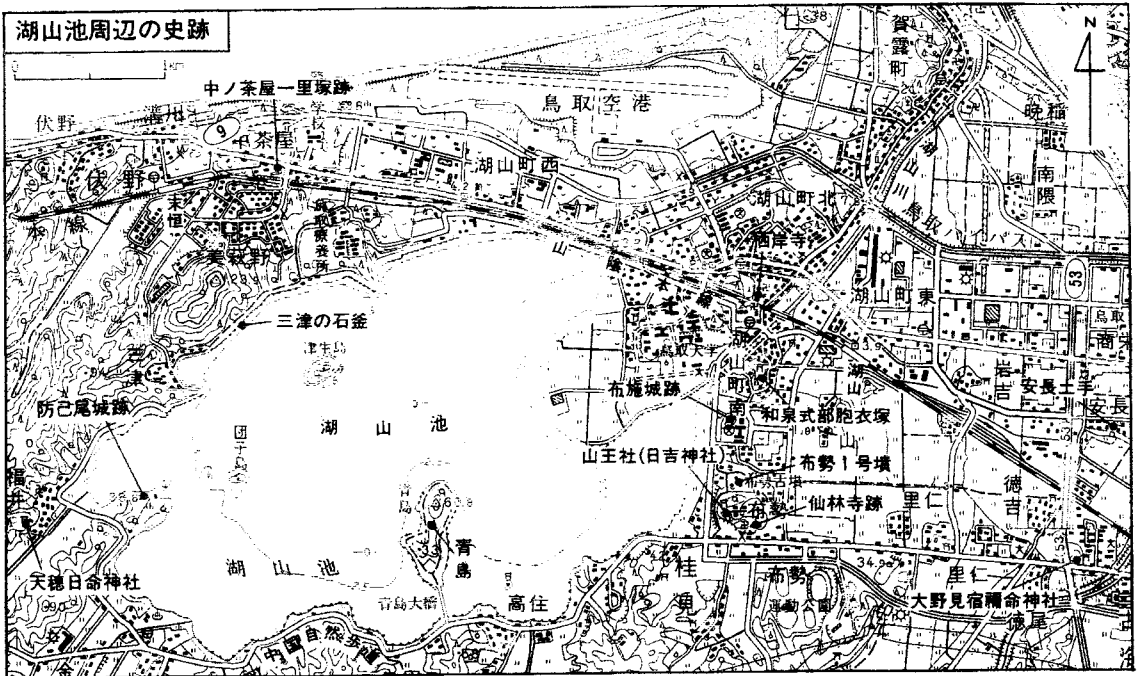
山名氏は清和源氏の八幡太郎義家の孫にあたる義重(新田氏の祖)の長男義範が宗家を継がず、上野国多胡郡山名郷(山名庄)に住んで「山名三郎」と称したことに始まる。その義範は源義経に従い、一ノ谷の合戦で功をたて、のち頼朝に近侍したという。

鎌倉末期の元弘3年(1333)、山名時氏が足利尊氏に従って京都に向かって戦功をたて、建武4年(1337)、伯耆国守護となる。さらに、観応の擾乱(かんのうのじょうらん、観応2年(正平6年[1351]))に乗じて因幡に侵入した時氏は、その実力で山陰地方を統治した。

南朝に帰順していた時氏は、貞治2年(正平18年[1363])、幕府と和議を結び、因幡・伯耆・美作・丹波・丹後の5ヶ国の守護に任じられた。そのさい因幡守護職は3男の氏冬に与えられ、これが因幡山名氏の初代である。当時、守護所は二上山城(ふたがみやまじょう、岩美町岩常)にあったと伝えられるが、因幡府中の鳥取久松山城(きゅうしょうざんじょう)説もある。

氏冬が30歳にも満たない若さで没した後は弟の氏重が継ぎ、以下、熙高(ひろたか) - 勝豊 - 上総三郎 - 豊氏 - 豊時 - 政実 - 豊重 - 豊頼 - 豊治 - 誠通(まこと、久通) - 見明丸 - 豊定 - 豊数 - 豊国と続き、約230年間、山名一族がこの因幡に君臨した。

常時京都に住み、在国することのなかつた守護も、応仁の乱を契機に在地性を強め、戦国時代、豊時系列の因幡山名氏は、布施天神山城を本拠として因幡経営にあたるようになったのである。



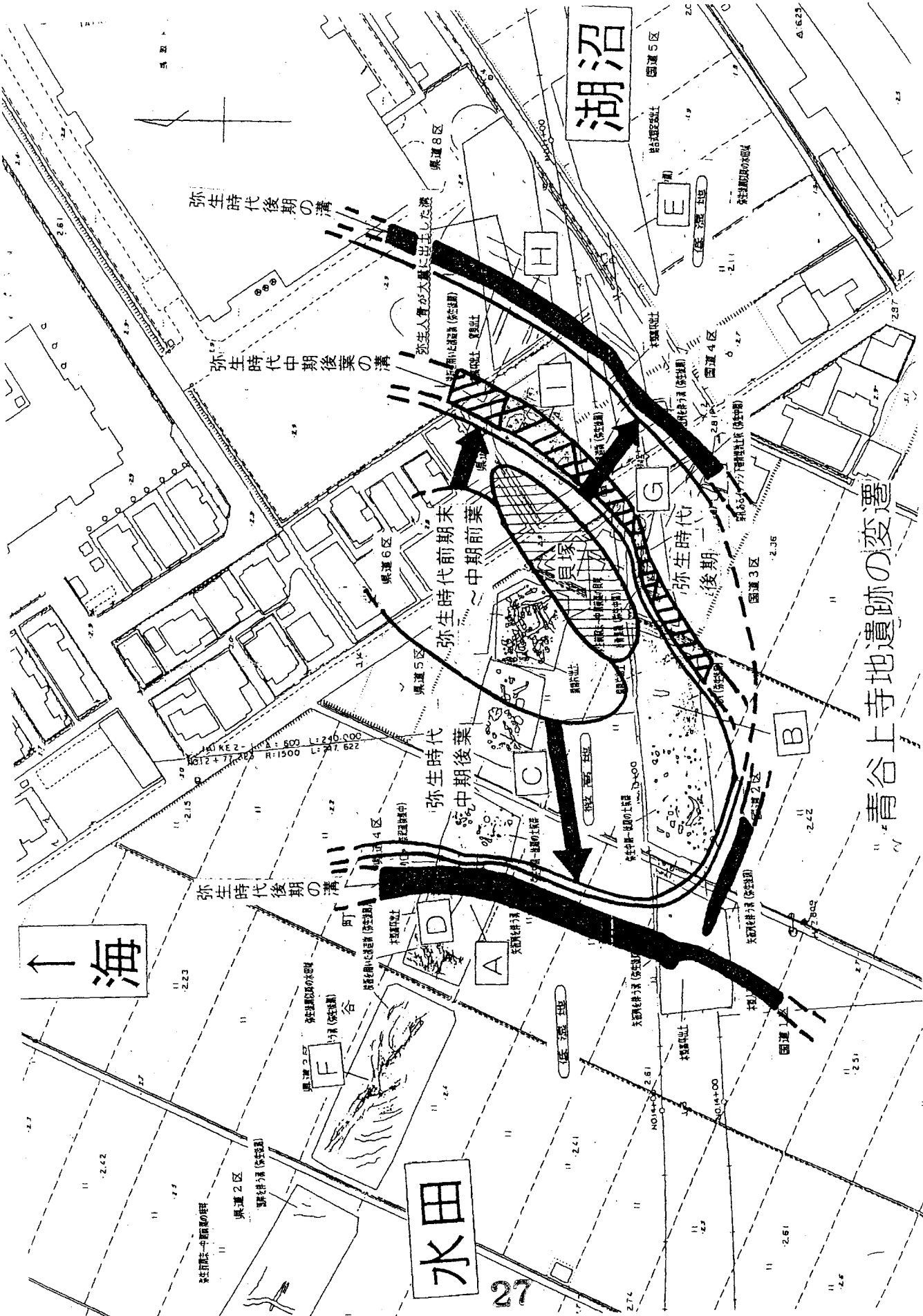
★青谷上寺地遺跡 (あおやがみじちいせき)

【弥生の宝箱・弥生の博物館】

鳥取県気高郡青谷町上寺地に所在する弥生時代から大和時代にかけての遺跡。

平成10年(1998)、9号線バイパス(青谷羽合道路)工事に伴う事前調査によって発見された。ただし、バイパスの道路幅しか発掘調査されていないので、集落跡がまだ見つからないし、遺跡の詳しい性格はまだよく分かっていない。しかし、出土遺物の多さは突出し

青谷上寺地遺跡の変遷



ており、弥生時代後期の生活文化を知る上で日本有数の遺跡である。

【遺跡の時代と立地】

青谷平野にはかつて湖が存在していたが、その西岸に遺跡が出現したのはいまから約2200年前の弥生時代前期後半ころのことである。弥生時代前期末から中期前半にかけて、遺跡の東側に貝塚が形成され、その後も人間の営みが続き、土砂や廃棄物が堆積していった。

弥生時代中期後半、約2000年前に、遺跡の南端に大型の建築材を転用して護岸施設とした溝が築かれる。この時期、鉄器の本格的な使用が始まり、大規模な土木工事や大型建築材による建物の建築も行われるようになった。また、秀麗な木造容器や骨角器の製作もこの時期から顕著になる。これらの遺物がよく残ったのは地質による。この地から海岸までの1kmほどが低湿地で、地中の豊富な水分で真空パックされたおかげで腐りやすい植物性のものや骨角の類も保存されたと考えられる。



《出土した木器類。高度な技術が使われている》

【出土鉄器の多さ】

青谷上寺地遺跡では、妻木晩田(むきばんた)遺跡を上回る約250点もの鉄器が出土した。これまでの考古学では、低湿地では鉄器は腐ってしまうと考えられており、そのことが畿内での弥生遺跡で鉄器があまり出土しない理由とされてきた。しかし、上寺地の鉄器は非常に保存状態がよく、低湿地でも腐るわけではないということが証明された。鉄器のなかには朝鮮半島製や中国製とみられるものも含まれている。海を越えた先進地との交流によって優れた文化や技術が取り入れられたことが分かる。

【目を見張る木器製作技術】

考古学者が驚いたのは、木器の豊富さと加工技術の素晴らしさである。木器は地中で腐りやすく、土器や石器と比べて出土数のはるかに少ないのだが、この遺跡では石器よりも木器の出土数の方がはるかに多い。高度な木器ができた背景には加工具である鉄器が豊富にあり、かつ優れていたことを示している。またその加工技術には、北陸地方と共通する特徴も認められる。弥生時代末期ころに北陸と山陰特有の四隅突出型墳丘墓が出現する以前に、すでに山陰と北陸との交流があったことを示している。

【大陸との交流】

大陸との交流を示すものとしては、中国新王朝の銭である貨泉、中国・朝鮮半島系の鉄器、朝鮮半島系の土器などがある。上寺地は海にも近く、矢板をうった溝は杭や板で護岸工事を施した水路であり、海と繋がっていたと考えられており、おそらく近くに港があったと思われる。遺跡の背後には、いまでも航海する船から目印とされる山があるので、当時から海上交通の拠点であったと推測される。日本最多のト骨が出土したのも、海や港、航海に関わる祭祀である可能性がある。

【大量の人骨の出土】

この水路では、いままでに例のないほどの人骨が出土した。骨はバラバラの状態であり、傷を受けた骨に



《鋸のない時代の最大の板》



《出土したト骨》

